

# 現代のいじめと子ども・学生

——人間の共同性の反乱としてのいじめと表現・民主主義——

法政大学キャリアデザイン学部教授 佐貫 浩

## (1) 暴力による支配—被支配関係から 民主主義による共同性の実現へ

最初に「いじめはなくすことができるのか」という問題を、歴史的視野から考えてみたい。そのためには、人類は共同性なしには生きられない生き物として作られてきたということを見ておく必要がある。

人類は、数百万年にもわたる進化の過程で、共同性というものを人間の本質として獲得してきたと考えられる。人間は猛獣に比べると弱い動物であり、集団に依拠しなければ生きられなかった。集団がコミュニケーションを介して意思を一致させ、互いに協同することによって、獲物を捕り、安全を確保してきた。その過程で、人類は、共同性なしには生きられないという性格を第二の本性として、人格に刻み込んできた。この共同性は横（同時代）に展開すると共に、縦（世代間）にも展開し、歴史を創り出し、かつてない高度な生産力と文化を創り出し、人間の力を驚異的に高度化した。しかし人間の共同性は、同時に厄介なもの、厄介な課題を背負わせるものでもあったと考えられる。

国家が成立する以前においては、人類は小さな集団を作って生きており、比較的対等な人間関係に依拠してその共同性を実現していた。ところが、人類はやがてもっと強力で高度な方法でその共同性を実現するようになる。その転換点は、およそ1万年前ぐらいに、気候変動なども関係して、各地で文明が形成され始める時であった。やがてエジプトやメソポタミア、あるいは黄河流域などに古代文明

が発祥する。

ところがそのような大きな集団になると、その共同性をどう管理しコントロールするかが、大きな難問となる。結局は強固な支配と被支配の関係を作り出すことで、その共同性を維持・発展させようとした。それは国家の出現を意味し、その国家権力による統制と管理の下で、人びとが共同的に生きていく関係を作っていた。しかし権力を手にした支配者は、その高度に実現された共同性によって蓄積された富を私的に所有し、人びとを支配し、搾取することを続けてきた。共同性実現の方法が低次の段階では、富の蓄積はわずかで、人びとはそれを平等に配分していたと思われるが、その方法が発展していくと、分業も可能となり、支配のための文化も形成されていく。

結局、国家が形成された段階からの人類史のほとんどにおいて、権力を掌握したものの手によって、大多数の被支配者、被支配階級が力（暴力＝武力）によって支配され、搾取され、時には命を奪われてきた。古代の奴隷制から中世の封建制度（農奴制）においても同様であり、およそ人権という概念が通用しないような理不尽な支配と被支配は長期にわたって継続し、いわば命をも勝手に奪うような「いじめ」が、支配の方法として当然の如くに行使されてきたのである。

このような支配と被支配の方法が普通であった時代を克服して、人間の平等、人権の保障という正義を人類が実現したことは、画期的な進歩であった。その最大の飛躍はヨーロッパ市民革命によって達成された。資本主義

が発展してくるにつれ、封建的支配を正義に反するものとして捉える人権思想が形成され、やがて市民革命が展開され、ホッブズ、ジョン・ロック、ジャン・ジャック・ルソーらによって、社会契約説が唱えられ、アメリカ独立戦争(1776年アメリカ独立宣言)やフランス革命(1789年)によって、それらの考えが、現実の政治制度の理念へと展開していった。

王による支配の正統性は、王権神授説によって与えられていた。神様が支配する権利を国王に与えたとされていた。だからこれは絶対的なもので、何人もその支配に抵抗できなかった。その神からの支配権の信託という論理を、ホッブズは、社会契約説という市民による契約の論理で逆転させた。この社会のなかでは人間は平等に作られてきている。しかしお互いに平等だといっても、「自然状態」に置かれるとき、自分の利益を実現するために、「万人の万人に対する闘争」が始まり、争いが起こって強いものが勝つ。そうなる则悲惨な世界になるから、自分たちの力を国家権力に委託して、国家権力が平和の秩序を作り、人権を守る役割を担う。国家権力というものは市民の社会契約の産物だとしたのである。そしてロックは、この論理を革命権の思想——社会契約によって委託された使命を実行しない政府を民衆は転覆する権利を持つ——にまで高めていった。そういう社会契約説という思想の大転換によって、初めて議会制度によって創りだされた権力が国王を処刑することも可能になった。

そのようにして、人間が平等である、統治の権利の正統性は自分たちにある、そして自分たちの意志を法に定めて、それに国家権力を従わせる、したがって国家権力は民衆の人権を勝手に奪うことはできないとされた。民衆は、はじめて自分たちを守る法的正義を発見し、民主主義という手続きこそが正義を決めることができるのだという論理が、社会的に承認されることになった。

そう考えてみるならば、力の強いものが弱いものを支配し、理不尽な抑圧や暴力を振るうことが正義に反することとして、法によって退けられるようになったのは、人類史で見ればごく最近のことなのである。そしてその過程で発見されてきた議会制民主主義や、討論による民主主義は、人類が持っている共同性を自治的、平和的にコントロールし実現していくための方法にほかならない。そういう方法は、まさに民主主義的な政治の方法として発見されてきたのである。

## (2) 子どもの自分本位性と共同性

なぜ、このような歴史的視野について述べたのかというと、実は子どもたちは、人類が長い歴史を通して人格のなかに人間の本質として刻み込んできた「共同性」を、どう実現すれば良いかわからず、いわばホッブズの言う「万人の万人に対する闘争」状態に置かれているのではないかと思うからである。そして、もしそうならば、子どもたちの関係の間でいじめを克服するためには、子どものなかに民主主義を立ち上げること、自治的政治を実現することが必要ではないかと考えるのである。今見たように、人類がその共同性を民主主義によって実現できるようになるには、とても長い時間を必要とし、また激しいたたかいも必要とした。そうであるとするならば、いじめとの取り組みは、子どもの世界に、平等で平和的な関係によってともに生きていく方法を見いだす政治と自治を創り出す挑戦、努力を生み出し、それを大人や教師が全力で支える必要があるのではないか。

「共同性」というのは相当やっかいなものである。他者とともに生きることが妨げられる時は、共依存というような密室における病的な支配と被支配状況が生まれることがよく知られている。またエーリッヒ・フロムが分析したように、ナチスの支配も、この人間の

共同性を操作したものであった（フロム『自由からの逃走』東京創元社、1984年、参照）。他者に受け入れられているという感覚、共同性のなかにいるという感覚が奪われることは耐えがたい苦痛になってしまい、それは現代のいじめの背景ともなっている。人間の存在から発する共同性要求が満たされないときには、個人のアイデンティティが奪われ、存在が極度に不安定になる。私たちは、子どもも含めて、こういう厄介な共同性という人間の本質を抱えて生きているということを認識しなければならない。

ところが子どもたちは、人類が何世紀もかけて苦悩を経ながら獲得してきた共同性を統治する方法を、自分たちの関係のなかで実現することについては、大変未熟である。なにしろ人間の赤ん坊は、徹底的な自分本位性の塊として産み落とされてくる。この自分本位性は、産み落とされた乳児が生きていく上では欠かせないものである。生きるためには完全に他者のケアに依存しなければならない赤ん坊は、自己の生存の危機を身体感覚を通してキャッチし、その内的な要求をまさに自分本位に他者に伝え続けるほかない存在である。それができないとき、赤ん坊は死に直面する。その自分本位性はある意味で、他者のケアを不可欠とする人間の共同性の論理によってこそ受け止められるという意味では、共同性の一環であると捉えることもまた可能であるが、他者との関係を調整する仕組みをとまってはいるという点で、一方的で自己勝手な要求の提示である。

だから人間は、生まれた最初から、他者と一緒に生きる方法を、関係のなかで獲得しながら成長していくほかない。ほとんど完全に他者のケアによって一方的な自分本位性を他者に受容される状態から、人間的共同性を自らも担う方法を獲得していく試練が始まるのである。

そしてその共同性の方法の獲得は、豊かな

共同の関係のなかで受容されつつ、他者との協同を巡る幾多の葛藤の試練を経ることで、初めて達成されるものなのである。従来、その試練の過程は、人間社会の子育て、子育ての仕組みのなかで、誰もが普通に通過し、誰もが成功的に達成していくことができるものとして存在し、特に意識されることも少なかったと思われる。それは人間の「社会化」の過程として遂行されてきた。そしてその過程を経ることで、人類が受け継ぎ発展させてきた人間の共同性を実現する技はようやく、次の世代を担う子ども・若者によって継承されることが可能になっていくのである。

しかし、現代社会は、社会それ自体が、人間の共同性を実現する技を獲得させる仕組みを次第に失いつつあるのではないかと思われる。第一には、あまりにも競争と排除の仕組みが肥大化しつつある。特に子どもを早い時期から競争させる仕組みが広まり、共同性に包まれるよりも、幼い頃より人間関係が競争を中心とするようなものに組み替えられつつある。他者との競争に勝ち抜かなければ人間としての誇りも自信も奪われてしまうような関係の中に幼い子どもが投げ出されている。第二に、子どもはお金に囲まれて、お金を通して他者への支配力を行使するような生活形態が増えている。お金は自己の要求を絶対化する。あり余る商品に囲まれて自分本位の欲求に支配されるような生活習慣もまた、自分本位性を肥大化させている。さらに本来労働は、人間の共同性の具体化の過程であるが、現代の労働は、人間の共同性を実感させる質を大きく失われている。第三に、子育て競争に親が巻き込まれ、また貧困が広まる中で子どもに対して理不尽な要求を親が突きつけたり、あるいはネグレクトを含む児童虐待が広まるなど、子どもに対するケアの困難によって、他者と交わる人格の形成自体が、大きな困難に直面している。第四に、少子化や地域交流の縮小、子どもの生活時間の変化、文

化の変化の中で、子ども同士が交わり、そのなかで共同性の技を発達させていく成長の時間と空間が喪失されてきている。いまや、個々の人格における人間的本質としての共同性を担う人間的な技の獲得は、人類史上かつてないほどに困難になってきているというべきではないか。

いじめは、このような技・方法の獲得に失敗し、自分本位性を肥大化させていくような事態と大きく関係していると考えられる。自分本位性とは、自分本位の内的な欲求に自分自身が全面的に支配されて他者と共に生きる「自由」を奪われた状態を意味している。人間は、成長の過程で、自分自身を対象化し、「今ある自分を乗り越えて、あるべき自分を作る」という自分の否定を介した新たな自分づくりへと向かっていく。そして自分が作り出した自分を絶えず対象化し超え続けることによって、自分自身による意識的な創造物としての自分を形成していく。そういう自己対象化という作用を意識的にできるということ、そしてそこに作り出した自分への誇りと自信を高めていくことによって、自尊感情が高まり、かけがえのない自己の尊厳の感覚を身につけ、自分と世界に対する信頼を獲得していくのである。それが失敗する時、誇りある自分を作り出せないままに、自分本位性に襲われ、一方的な要求を他者に攻撃的にぶつけていくような関係が生み出される。

そういうふうにして自分本位性が克服されず、逆に肥大化した自分本位性を抱えた子どもたちが集まったときに、自分のほしいものを取りあって、強いものが勝つということが、当たり前の関係となる。そう考えてみると、子どもたちは、現状では、自分本位の欲求の塊のような感情と身体を持って、他者とぶつかり合い、強いものが支配し弱いものが支配される関係から出発するしかない。子どもたちの世界で、支配・被支配という人類が長い間苦しみ格闘してきた関係がもう1回繰り返

されることになる。しかしそういう事態をただ監視し禁止するだけならば、子どもたちに試行錯誤しつつ関係を作ること自体を禁止することになる。小さな子どもは、完全に平等で対等な関係から出発することなどできない。だから、子どもが人と結びついて共同性のなかで生きたいと思えば、発達の試行錯誤の結果としていじめが起きることは、避けがたいこととなる。

### (3) コミュニケーションと自分本位性の克服

この自分本位性を克服する上で、文化の獲得とコミュニケーションが大きな役割を果たす。人類は、長い営みのなかで、価値や値打ちに感応していく力（感応力）を獲得する。例えば恋愛という感情を考えてみよう。猿と人間が愛の感情において決定的に違うのは、猿は体に刻み込まれた動物的本能に支配されて性的関係を営むけれども、人類は、それに加えて、愛するという感情を伴った文化の継承と発展によって、愛するという独自の感情を高め、その感情を介して性的関係をより豊かに取り結ぶようになっていったと思われる。人は、恋愛小説などを読むことを通して、よりはっきりした愛の感情を身につけ、愛にあこがれるようになる。そしてその感情に突き動かされて恋をし、性的関係を営む。こういうヒューマンな感情や、科学的な精神、正義の感覚などを人間は、文化や科学などを通して多様に経験する。科学的に正しいとされたことを受け入れる精神もまた身につけていく。その結果、科学的真実が争われる場面では、自分の考えや行動をその科学的真実に合わせるようになる。そういう価値を含んだものを受入れ、そういう価値が他者から提示されたときに、それに共感し、同意するという力を、自分の中に蓄えていく。そのことは自分本位性の克服にとって大きな意味を持って

いる。文化を学ぶことは、人類が蓄積してきた価値あるものへの共感力を身につけることであり、自分の感情をそういう普遍的な価値あるものに依拠したものへと作り替えていくことである。自分本位性とは自分自身の利己的な感情によって自分が支配されることだとするならば、自分の外にある優れた文化の価値に共感し、それを実現することを自らの要求とすることができるようになることは、自分本位性の克服という意味を持つ。

実はそのことは、討論という形のコミュニケーションの成立と深い関係を持っている。コミュニケーションが成立するのは、実は、人びとの人格のなかに、今指摘したような普遍的な価値への感応力が蓄積されて、コミュニケーションを介して他者から届けられる言葉に組み込まれた価値が、それを受け取った聞き手のなかで、その人を動かすことができるからである。そういう人間的価値を組み込んだ言葉が送られてくるとき、その聞き手は、その送られてきた価値に対して、自分の価値感応力を働かせて、送られてきた価値と交渉、あるいは対決させ、自分を組みかえたり、他者に合意したりして、自分を発展させるのである。言葉が本当の意味で他者を動かすのは、言葉の命令に背く時に暴力的制裁が働くからではなく、言葉それ自体に組み込まれた価値が、聞き手のなかに蓄積された価値共感力に働きかけて、その人間を内側から突き動かすからにはかならないのである。道理のあるもの、正義であるもの、科学的で合理的なもの等々が送られてきたら、それに共感する感応力を蓄えている聞き手を内部から突き動かすのである。そういうコミュニケーションの方法は、徹底的に自由で平和な関係の中で実現されるものとなる。なぜならば、メッセージを送る人間が権力や暴力を持っているからではなく、送り出された言葉に価値が組み込まれているならば、読み手自身の側に蓄積されている価値共感力が、その受け手自身をその

価値に同意させるように働くからである。それは、根本的に自由な人間同士が、自由にコミュニケーションすることで力が及ぼされ、物理的な強制は一切なしに関係が成立し、優れたものが広がり、共同を作っていく方法である。コミュニケーションは、最も平和的で自由な関係においてこそ、最も強い力を及ぼす方法なのである。だからこそ、平和と自由の中においてこそ、人間は最も力を持つことができる。

しかしこういう自分本位性を克服したコミュニケーションの方法を身につけ、高度な共同性の方法を実現していくことは、簡単にはできない。子どもは、他者との交わりのトラブルを沢山経験しつつ、どうやって解決していけばいいかという訓練を重ねてはじめて、平等な関係を取り結べるようになっていく。これはすごいエネルギーを必要とする。そのエネルギーは、ともに生きていくことが楽しいという状況によって作り出される。このようなコミュニケーションの獲得は、いじめを克服していく強固な基盤を形成する。そしてそれは学校教育の基本的な役割と責務なのである。今日の激しいいじめの蔓延は、そういうコミュニケーションの形成に学校が失敗していることの結果でもある。

発達の試行錯誤の中では、支配と被支配の関係がいつでも登場する。しかしそれを超えて「楽しい生活」を実現したいという要求が、その危機を克服させる。いじめは、それ自身を絶対的になくすことはできないし、そうしてはいけないというべきだろう。しかしそれと同時に、子どもの中の発達の試行錯誤としてのいじめが、平等で民主主義的な関係性の取り結び、それを媒介するコミュニケーションの獲得へと組みかえられていくための指導や環境が不可欠であり、それがあかないかが非常に大きな分かれ目となる。

#### (4) いじめの残酷さはどこから来るか

いじめがある意味で不可避であるとしても、今日展開しているいじめの残酷さには、特別なものがある。どうしてそうなるのか。結論からいうと、いじめは人間の本質に関わるからこそ、残酷になるということができる。人間にとって、自己に組み込まれた人間的共同性の欲求を実現すること、他者と関係を結んでその中で自分の存在の価値が証明されるということは、切実なものとなる。これが実現できないときに、人は様々な仕方で、強迫的に、そして病的にもこの共同性を実現する方法を追求する。

例えばナチズムは人間の共同性への要求を操った。第一次世界大戦のあと、ドイツ社会は経済的に困難に陥り、青年の間に失業が広がり、未来への希望が奪われ、孤立感と無力性が強制されていく。そのときにヒットラーは、青年の孤独感を利用して、ヒットラー・ユーゲンツ（青年行動隊）を作り、彼らに暴力をも含む強い力を与える。そしてユダヤ人を抹殺することがドイツ人の栄光にとって不可欠だというイデオロギーをかれらに注入する。そこに参加した青年たちは、はじめて社会のなかでドイツ人という共同性を担う自分たちの役割が与えられたという充実感、アイデンティティを獲得し、ナチスの尖兵となっていた。

自信を奪われ、社会から排除されて、共同性への参加を拒否される時、人はそれを代償するいわば擬似的な共同性の方法を自ら作り出すことで、他者と共にあることを演出しようとする。そこでは、共にいること、そしてその関係の中で自分の力を発揮することが自己目的となる。関係を作る方法は暴力であったり、集団の力を操作して人を排除するゲームであったりする。その共同性ゲームには、不安や排除から来るストレスや、支配的人物の自分本位性や、孤立を恐れる脅迫的な同調

性などがすべて持ち込まれる。そしてそういう中で、暴力的支配と排除のゲームが進展する。

なぜいじめが残酷になるか。その解答は、残酷にならなければ生きていけない環境が与えられたとき、ひとは残酷になってしまうという論理の中にある。いじめのゲームが展開しているなかで、いじめの勢力が支配的な力を持っているときには、周りの子どもたちもまた、自分の安全を確保するために、どの位置にいることが安全かと必死に考えて、いじめが自分に向かわないように防御しようとする。一方、いじめる側も、ある意味で天才的な感覚で、残酷ないじめの方法——それはいじめている側にとっては面白いいじめの方法である——を開発していく。そしてそういうなかで、ドイツナチズムが発見したような人間支配の方法を、子どもたちが自分で発見してしまう。

精神科の医師でもある中井久夫は、いじめを「孤立化」「無力化」「透明化」の三段階の過程でとらえその本質を鋭く解明している（中井久夫『アリアドネからの糸』みすず書房 1997年、参照）。

「孤立化」とは、誰に助けを求めてももうお前は誰にも救ってもらえないという状況を作り出すことである。チクつたらもっと徹底的にいじめられるから、チクれなくなる。そうすると自分の困難をだれも救ってくれないという完全な孤立に陥る。そうすると全く自分が無力な存在であると感じるようになる（無力化）。自分が無力だというときに、攻撃を受けないためには、絶えず支配者の意図を先取って行動する。主人に逆らった途端に攻撃が来るから、主人が何を考えているか先読みして行動することによって、自分の安全を確保する。絶えず支配者の顔を見て、自分の意志を隠す。そうすると自分の意志がなくなってくる。それを他から見ると、あいつらはつるんでいるとなって、いじめが見えなくなって

「透明化」する。こういうある意味で高度な方法によって、徹底的にいじめられている者を苦しめると共に、いじめが見えないようにする。どうやったらもっと楽しめるかと、いろいろな工夫をする。そして人格の最も核心にあるようなプライドやアイデンティティや他者と一緒に生きているというような感覚を徹底的に破壊する方向でいじめの方法を発見していく。そこに残酷さが生まれてくる。困らせる方法をどんどん開発することがいじめのおもしろさを高めていくということになり、その結果残酷さもどんどん進んでしまう。中西新太郎は「加害の側の共同が実感できるためには、被害者は徹底して踏みつけにされねばならず、いわばいじめられ尽くさなければならぬ」（『思春期の危機を生きる子どもたち』はるか書房、2001年）と指摘する。

いじめられている子どもを心配している友だちがいたら、その友だちに、いじめることを強要するというような残酷さも開発してしまう。それをしないとその友だちが今度はいじめのターゲットにされてしまうという圧力のなかで、その友だち自身がいじめに荷担させられる。人間の良心や正義感をずたずたに引き裂いてしまうような残酷な方法を開発してしまう。人間にとって耐えがたいような状況を作りだして、その挙動をおもしろがるというようなことが拡がり、そういうなかで自殺も引き起こされたりする。

同時に、いじめ空間のなかでは、残酷にならないと生きていけないという面も展開する。いじめが起きそうな空間では、いじめのターゲットを作って、それを攻撃する側に居続けないと安全を確保できない。自分がその空間のなかで安全に生きていくために、他者を貶める機会をうかがうというようなことも起こる。いじめの空間が、良心的な子どもをして、孤立を恐れる故に、自らいじめの戦略を行使し、人間としてのずるがしこさや卑怯性を生き残り戦略として行使するように仕向ける。

それらを考え合わせると、いじめには、病的な共同性への欲求と共に、他者を包む暖かい人間的共同性への憎悪の衝動も同時に含まれているとすら言える。排除された人間のなかに、暖かい共同性に包まれた者へのねたみと怒りの衝動が働いているのかもしれない。そしていじめによって残酷な世界で、主導権を持った関係性を作りだし、そのなかで歪んだ形で、他者とつながっているという実感を維持し、あるいは他者を支配しているという力の実感を回復しようとするところに、いじめが展開する。

森田洋司の、いじめの四層構造論は、そういういじめの力学をわかりやすい姿で示してくれている。いじめは、構造を持っており、子どもたちはその構造を構成している部分として行動する。いわばいじめという空間の論理に囚われて、いじめに荷担してしまうという性格を持っていることがそこには示されている。四層構造論とは、いじめはいじめた人間といじめられる人間の関係だけで成り立つものではなくて、被害者、加害者、観衆、そして傍観者という構造を持っているというものである（森田洋司『いじめ 教室の病』（新訂版）金子書房、1994年）。いじめが成立するのは、観衆がいて傍観者がいて、それを止めに入る（介入する）ことができない者が大量にいるという四層構造があるからであり、いじめに直接には関わっていない者もまた、このいじめを成立させている一要素となっているのではないかと考える必要があることが、そこには示されている。

## （5）いじめと表現の自由、そして思想形成の困難

そのことにも関係するが、「表現の自由」という側面からも、いじめを捉えていく必要がある。土井隆義は、岩波ブックレット『「個性」を煽られる子どもたち』（2004年）で、「優し

「優しさの技法」という概念を提起している。「私はいつでもあなたの望む自分であり続けますよ、私は常にあなたに同意し、あなたと共にいますよ」と、他者にとって優しい自分を演じ続けなければ、いつ仲間から孤立してしまうかわからないという不安に襲われている状態があり、そのためいつも周りに同調のメッセージを送り続けているという様相を指摘している。それは、本当にその人に優しいのではなく、絶えず周りの雰囲気やその人の望みに従属する自分を演出することによって、強迫的に関係を維持する行為をとり続けていることを意味している。ネットで即レスをしないと、いつ仲間から外されるかわからないと考え、メールなどにもいつも神経を使っている。そういう雰囲気が広がっているから、逆に、いじめの仕掛け人は、同調しないもの、この「優しさの技法」を身に付けていない者をあぶり出し、いじめをゲームのようにして作りだしていく。

ある意味で、この「優しさの技法」は、ひとつの表現方法ではある。にもかかわらず、それは自己表現とは全く別のものに変化している。他者の支配に従属する自分を演じ続ける。それはある種のキャラを演じることを意味する。実は、そのことは、表現の自由が、日本社会でしっかり人格のなかにとらえられていないという問題ともつながっている。大学生に、学校教育のなかで、表現の自由を行使してきたかを聞いてみる時、多くの学生が、小学校、中学、高校と学年進行と共に発言しなくなっていることを告白している。小学校のころ、盛んに手を挙げていた子どもが、間違うと恥ずかしい、あるいは正解を言うと「何いいかっこしてるんだ」という目で見られたりするなかで、そういう空間で一番安全に生きる方法として、「何もしゃべらない」戦略を行使するようになる。そして表現の自由を行使する力も習慣も失っていく。そういうマイナス面と、他者とつながるために絶えず周り

に強迫的に優しい自分を演じ続けるという面とが合わさって、大学生もまた、自分の意見を主張したり、自分を作り出す表現行為をシュリンクして大学生活を送っている。いじめの空間は、表現の自由を大学生からも奪うことで、能動的に社会に働きかける学習主体を育てるという大学の仕事にも大きな困難を及ぼしている。

今子どもたちに民主主義とは何かと問うと、たいがい多数決民主主義のことだと返事が返ってくる。そして、多数決民主主義というとき、もともと多数がどういう意見かがわかっているのだから、少数意見を持つ者は、面倒な異論を提示しないで、早く多数意見に従えというような思いがそこに抱かれていることが多い。しかし本当の民主主義とは、少数者の意見であっても、そのメッセージに説得性があれば、少数意見から多数意見へと転化できるプロセスが保障されているということが不可欠である。したがって、意見を交換し、たたかわせるコミュニケーション過程が組み込まれるときにこそ民主主義は本当の民主主義になる。しかし個人の困難が「自己責任」化され、また表現における「同調」圧力が高まっていくと、本当に抱えている個人の困難を、他者も参加する公共的な空間に提起して、共にその解決に協同してくれることを求めることがなかなかできなくなる。そして他者に好まれる自分を演出するという力学が働くと、そういう場で自己の課題や主張を提起し、論争して何が真実かを明らかにしていくような探究的、論争的討論（コミュニケーション）が困難になる。「優しさの技法」を行使しているかぎり、討論ができず、公共性空間が立ち上がってこない。大学のなかでも、今何を問題にするべきかを議論する公共的な空間を作ろうとしても、それがなかなか立ち上がってこない。討論で他者の意見を批判することが極力避けられる。いじめの恐怖体験、他者を批判することの危うさを味わっているから、

批判的討論を展開することが、非常に難しくなっている。

またそのこととも関係して、学生や青年が、「思想」を持って他者と議論するということが、困難になっているのではないかと感じる。社会的問題においては、 $\langle 1 + 1 = 2 \rangle$ というように個の判断を超えて客観的な絶対的正解が存在するという事はない。 $\langle 1 + 1 = 2 \rangle$ で決まることであれば、議会での議論など不要で、優れた科学者とその結論を実行する行政機構があれば「正解」は実現できる。しかし社会的問題は、利害があって、何が正しいかは、個人的にそれぞれが判断することが基本となる。その思考をより科学的、普遍的な判断として高めていくことが思想形成なのである。証拠を集め、先人の思考を批判的に摂取し、他者の考えとつきあわせ、矛盾を克服し、体系化し、より説得性のある体系的な考えを作っていくことが思想の形成にはほかならない。したがって思想は、単なる自分の主観の表明ではなく、公共的な場で疑問が対置されたときに、その説明責任（「応答責任」）をいつでも引き受けることができる構えを組み込んだ体系的な思考だということができる。だから、思想を形成することを通してこそ、人々は、公共的な場で議論に参加し、公共的な正義を探究していく共同的討論に加わることが可能になっていくのである。応答責任を持った思想なくして公共性を担うことはできない。

ところが、学生にとっては、「思想を持つ」ということは、自分が中立の立場を犯してしまうのではないかとか、他者に対立する自分を創り出すことではないかと恐れ、また研究者にならないから思想は必要がないとかの受け止めが強い。先ほど指摘した「優しさの技法」は、気分でどれだけ一致できるかの戦略が飛び交う空間を創り出し、だから率直な疑問すら出せないし、ましてや論理的批判は非常に困難となる。だからそこでは本当の思想の

ぶつけ合いを通して議論をするという学問的正義の探求も困難となる。したがって当然、政治問題についても議論そのものが忌避される傾向が強まる。そのために大学は未来の社会の主体を作る学びの空間を作りだすことが難しくなっている。

## （6）いじめの心的外傷からの回復と表現

表現は、いじめのトラウマからの回復にとって非常に大きな意味を持っている。ジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』（みすず書房・1996年）が重要な指摘をしている。

この本は、戦争後遺症や虐待、性的暴行などで深刻なトラウマを背負わされた人たちが、どう回復していくか、それに必要な支援とは何かを深く探究したものである。そのような被害者たちは、他者とのつながりを遮断され、自分の意思を表明してもそれに共感してくれる他者を喪失し、暴力への極度の恐れから多くの身体症状を引き起こし、徹底的に自分は無力だと感じ、再び他者や社会とのつながりを持つことができないという絶望を強制されている。自律神経が変調し、子どもは、身体的発達すら困難になってしまう。

そういう状態の中で、表現の回復が、非常に大きな意味を持っている。表現とは、自分の思いを受け止めてくれる他者を再発見すること無しにはできない。それまでの、暴力や虐待におびえる状態から、自分を守ってくれる他者がいて、安全を保障し、自分の思いに共感してくれる他者に囲まれているという思いを抱けるようにすることが、回復治療の基本となる。虐待やいじめは、そういう人間の能動性を閉じこめ、自分の意思で生きることを断念させ、自分を自分の意思で創造していく回路を閉ざしてしまう。表現とは、自分の意思による自分の創造行為であり、そういう主体的な自分を他者との関係のなかに展開し、

自分が参加した世界それ自身を作りだしていく能動的な行為である。表現とは結局、この世界に参加していく方法そのものである。それは、先に紹介した「優しさの技法」とは大きく異なっている。

さらにいえば、コミュニケーションによって自分の能力を発揮できるということが、人間の本当の能動性、力の発揮を保障する。人間の力は、表現なしには現実できない。先に見たように、互いの人格に獲得された人間的な価値に共感する能力を介して、他者に力を及ぼし合う行為がコミュニケーションであり、他者に対して力を及ぼすこと——力の発揮——は、この平和的なコミュニケーションを使いこなすことによってこそ具体化できる。コミュニケーションを封じることが、この力と人間としての能動性を奪う。

いじめは、先に指摘したように、「孤立化」「無力化」を強いられ、自分を能動的に創造するという主体的行為を奪う。少しでも「主人」の思いに逆らう「主体性」を表現したとたんに攻撃が襲ってくるために、自分の能動性、主体性を自ら完全に封印してしまうという防衛機制が働いてしまう。表現の回復とは、そういう心的外傷状態から、もういちど表現を引き出し、自分の意思で、自分の思いで生きていって良いのだという安心と主体性を引き出す営みなのである。そしてみんなとともに生きるという、人間が持っている人間の本質としての「共同性」を主体的に生きることができると状態を取り戻していくことである。

日本の子どもたちの中で、いじめが広がっているということは、その意味で、自分を創造する方法、人間がその能動性、創造性、自由な発展性を実現する方法、あるいは人間的に成長していくために不可欠な方法、人間が主体的に生きていく上で欠かせない最も根本の方法としての表現が、その発達が一番重要なプロセスで、抑制され剥奪されるということの意味している。いじめによる絶望、ある

いは不登校とかひきこもりなどが、日本社会に広がっているということの深刻さを、しっかり捉える必要がある。

今、教育は、いじめと正面から向かい合う必要がある。また大学生は、半数ほどがなんらかの形で、いじめといじめられの経験を持ち、表現の自由を抑圧されてきたという経験を抱えている。だからこそ、いじめの問題は、現代社会で人間が人間として成長していく上で、克服すべき最も深刻な共通の問題として、若い世代がどういうふうにも成長していけるかという問題として、切実な問題としてある。そしていじめ、いじめられ体験をくぐり抜けてきた今日の大学生こそ、その経験を意味化し、組み替えることを通して、現代のいじめの中にある子どもの苦悩を真に理解し、支える大人、教師として、新たな教育の希望をつくり出す世代とならなければならない。